

# 右近

世阿弥作

前

ワキ 鹿島の神職

シテ 貴女

ツレ 侍女

後

シテ 桜葉の神

地は 京都

季は 三月

「四方の山風のどかなる。く。雲井の春ぞ久しき。

詞

「そもく是は鹿島の神職何某とは我事なり。われ此度都に上り。洛陽の名花残りなく一見仕りて候。また北野右近の馬場の花。今をさかりなるよし承り候ふあひだ。今日は右近の馬場の花をながめばやと存じ候。

道行

「雲の行く。そなたやしるべ桜がり。く。雨は降りきぬ同じくは。ぬるとも花の陰ならば。いざや

詞

「急ぎ候ふ程に。是は早右近の馬場に着きて候。あれを見れば花見の人々と見えて。車をなれば興をつづけ。まことにおもしろう候。しばらくやすらひ花をながめばやと存じ候。

シテサシ

「春風桃李花の開くるとき。人の心も花やかに。あぐがれいづる都の空。げにのどかなる時とかや。

シテ、ツレ一声 「見渡せば。柳桜をこきまぜて。錦をかざる花車。

シテ 「くる春ごとにさそはるゝ。

二人 「心もながき気色かな。

下歌地 「花見車の八重一重。見えて桜の色々に。

上歌 「ひをりせし。右近の馬場の木のまより。く。か

げも匂ふや朝日寺の。春のひかりも天満てる。神  
の御幸のあとふりて。松も木高き梅がえの。立枝  
も見えて紅の。初花車めぐる日の。轅や北につゝ

くらん。く。

ワキ 「のどかなる頃は弥生の花見とて。右近の馬場の並  
木の桜の。陰ふむ道にやすらへば。

シテ 「げにや遥に人家を見て。花あれば即入るなれば。  
木陰に車を立てよせけり。

ワキ詞 「むかひを見れば女車の。所からなる昔語。思ひぞ  
いづる右近の馬場の。ひをりの日にはあらねども。  
見ずもあらず。見もせぬ人の恋しくは。あやなく

今日やながめくらさん。是れ業平の此所にて。女車をよみし歌。今更おもひいでられたり。

シテ「あらおもしろの口ずさみや。右近の馬場のひをりの日。むかひに立てる女車の。所からなる昔語。はづかしながら今はまた。我身の上に業平の。何かあやなく分きていはん。思ひのみこそしるべなりしを。」

ワキ「左様にながめし言の葉の。其旧跡もこゝなれば。」

今またかやうに事問ふ人も。いつ馴れもせぬ人なれども。

シテ「たゞ花ゆゑに北野の杜にて。」

ワキ「言葉をかはせば。」

シテ「見ずもあらず。」

地「見もせぬ人や花の友。く。知るも知らぬも花の陰に。相宿りして諸人の。いつしか馴れて花車の。榻立てゝ木のもとに。下りゐていざやながめん。」

げにや花のもとに。帰らん事をわするゝは。美景  
によりて花心。馴れくそめてながめん。いざい  
ざ馴れてながめん。百千鳥。花になれゆくあだし  
身は。はかなき程に羨まれて。上の空の心なれや。  
上の空の心なれ。

ロンギ地

「げに名にしおふ神垣や。北野の春も時めける。神  
の名所かずくに。

シテ

「ながむれば。都の空のはるぐと。霞み渡るや北

野宮居。御覧ぜよ時をえて。花桜葉の宮所。

地

「花の濃染の色分けて。紅梅殿や老松の。

シテ

「緑より明けそめて。一夜松も見えたり。

地

「日影の空も茜さす。

シテ

「紫野行きしめ野ゆき。

地

「野守は見ずや君が袖。ふるき御幸の物見とて。車  
も立つや御輿岡。是ぞ此神の御旅居の。右近の馬  
場わたり。神幸ぞたつとかりける。

ワキ詞

「あらありがたの御事や。かくしも委しく語り給ふ。社々の御本地を。なほく教へおはしませ。

シテ詞

「まことは我は此神の。末社とあらはれ君が代を。守りの神と思ふべし。

ワキ

「よくく聞けば有難や。守りの神とはさてくいづれの霊神にて。かやうにあらはれ給ふらん。

シテ

「あらはづかしや神ぞとは。あさまには何と岩代の。

地

「待つこと有りや有明の。く。月も曇らぬ久方の。

天照神にては。桜の宮と顯はれ。こゝに北野の桜

葉の。神とゆふべの空晴れて。月の夜神樂を待ち

給へと。花に隠れ失せにけりや。花に隠れ失せに

けり。  
(中入)

ワキ歌

「げに今とても神の代の。く。誓ひは尽きぬしる

しとて。神と君との御恵み。誠なりけり有難や。

く。

後ジテ

「天皇の賢き御代を守るなる。右近の馬場の春を得

て。花上苑に明にして。軽軒九陌の塵に交る神心。

和光の影も曇なき。君の威光も影高く。花もゆる  
がず治まる風も。のどかなる代のめでたさよ。

地「曇りなき天照神の恵みを受けては。桜の宮居とあ  
らはれ給ひ。

シテ「こゝに北野の神の宮居に。

地「花桜葉の神とあらはれ。曇らぬ威光を頭衣の。袖  
もかざしの花盛。  
(中の舞)

地「月も照りそふ花の袖。く。雪をめぐらす神かぐ

らの。手の舞足ぶみ拍子をそろへ。声すみわたる  
雲の棧。花に戯れ枝にむすぼゝれ。かざしも花の

糸桜。  
(破の舞)

シテ「治まる都の花盛。

地「治まる都の花盛。東南西北も音せぬ浪の。花も色  
添ふ北野の春の。御池の水に御影をうつし。うつ  
しうつろふ桜衣の。裏吹きかへす梢にあがり。枝

に木伝ふ花鳥の。とぶさにかけり雲につたひ。遙  
かにあがるや雲の羽風。遙かにあがるや雲の羽風  
に。神はあがらせ給ひけり。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第四輯』大和田建樹 著